

見樹院ニュース

O T E R A NEWS

第43号 2005年6月6日発行

浄土宗 見樹院

住職 大河内秀人

〒112-0002 文京区小石川 3-4-14

TEL03(3812)3711 FAX03(3815)7951

<http://www.kenjuuin.com/>

E-mail : info@juko-in.or.jp

せ が き え 施餓鬼会のお知らせ

年に一度、檀信徒が一堂に会し、無縁仏など、ふだん忘れられがちな仏さまも供養し、自分自身の餓鬼(むさぼり)の心をしずめ、長寿と健康を祈る法要です。みなさんでご参詣下さい。

日時：6月26日(日)

11時～ 受付

11時半～ 法話

12時半～ 施餓鬼法要

法要、墓参、檀信徒のつどい、会食

※折り返し、出欠(人数)、塔婆供養のご連絡をご返信下さい。お塔婆は1本3000円で承っております。

ほとけさまのおしえ

冷静な知性と理性が人々を救う

本当の対立軸を見極めよう

歴史教科書問題や政治家の靖国神社参拝などをめぐって、中国や韓国で反日感情が噴出す出来事が相次ぎ、それを受けて日本国内でも両国政府や人々に対する反感が盛り上がりました。新聞、テレビ、週刊誌などのメディアも、客観的で正確な情報や分析よりも、人々の感情を刺激し煽っているように思えます。そもそも感情の問題などではないことは当然ですが、事件や摩擦を引き起こし、不安と憎悪を煽ることで軍国主義やナショナリズムを台頭させるしくみに、日本の人々がまんまと乗せられているのを、イスラエルを長年見てきた私は、とても歯がゆい思いで見えています。

私たちは感情に流されることなく、物事を正しく捉え、理性に基づいて行動しなくてはなりません。それを邪魔するのが、欲と怒りと無知であることを自覚し、そもそもの原因を冷静に分析し、問題の仕組を捉えることから解決が見えてきます。

おぼん だなぎょう お盆のお棚経について

お盆に住職がお檀家のお家にかがう「お棚経(たなぎょう)」をおこなっています。

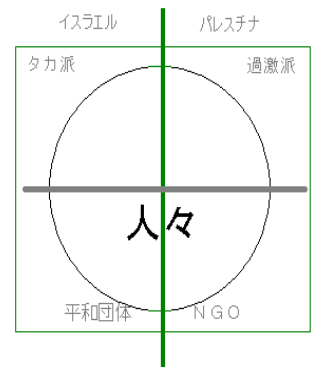
東京では7月13日から15日がお盆期間と言われますが、7月上旬からまわりはじめます。他県など地域によっては、8月13日から15日頃にかがいます。新しい方やこれまでうかがっていなかった方もご希望がありましたらご連絡下さい。遠方の方もどうぞ遠慮なく。

新盆の方(新しい仏様のある家)でご親戚を集められる場合は、優先して日程調整・時間調整をさせていただきますのでお早めにご相談ください。飾り方なども、どうぞお気軽にお訊ね下さい。

イスラエルとパレスチナという2つが対立していると、一般的には考えられています。下の図で言うと縦軸による左右の対立です。もちろんそれ自体は間違いではなく、政治的な駆け引きがあることも事実です。その対立は、パレスチナの過激派とイスラエルのタカ派によるテロと報復の応酬で拡大しました。その間、双方で犠牲者が出れば出るほど、不安と怒りが高まり、人々はこの図で言う上側の武闘派に引っ張られ、イスラエルではタカ派が、パレスチナでは過激派が支持を伸ばし、溝をさらに深めました。

この結果からもわかるように、タカ派と過激派は、対立しているというより、利害が一致していると考えべきです。軍事予算は拡大し、過激派のプレゼンスも高まります。

一方で、イスラエルにもパレスチナにも、平和的解決をめざす人々がいます。彼らの多くは相互に協力し合って運動を続け、人々に《4ページに続く》



もしも“そのとき”が来てしまったら・・・

保存版

お葬式で後悔しないために

1日でも長生きしたい。1分でも長く生きてほしい。しかし、いつかは必ず迎えなくてはならない死と別れ。終えた人生をしっかりと受け止め、その意志を受け継いでいくためにも、その人らしく、悔いの残らないお葬式をしたいものです。そのためには周囲の声に惑わされたり、業者の都合に乗せられたりしないよう、正しい知識とはっきりとした意志を持ち、本人も遺族もしっかりとした心の準備と的確な対応をしていただきたいと思います。

■まずはお寺に連絡を

すぐに見樹院または住職の携帯にお電話下さい。24時間いつでも結構です。可能な限り、ご自宅でも病院でもすぐに駆けつけ、枕経（まくらぎょう＝亡くなって最初に読むお経）をおつとめし、ご相談などをお受けします。

■病院からの搬送

病院で亡くなった場合、通常、ご遺体を搬送するところから、葬儀屋さんをお願いすることになります。そのとき、病院でも葬儀屋さんを紹介してくれますが、そうすると、その後の葬儀もそこに任せることになります。そうすると葬儀の会場が限られてしまい、ご自宅から遠い場所でやらざるをえないということにもなりかねません。もう亡くなった以上、一刻一秒を争う問題ではないので、まずここでしっかり考え判断することが大切です。

■葬儀社選びはお葬式の場所を考えて

最近では自宅での葬式はほとんどなくなりました。民間の葬祭場や火葬場の斎場、お寺や町会・自治会の会館などが一般的です。そのかたその家にふさわしいお葬式をする上で、場所は大きな問題です。弔問される方々の利便性も考えなくてはなりません。葬儀社を選ぶ場合、どこでお葬式をするかが大きなポイントです。

◇自宅

最近では少なくなりましたが、やはり最後は自宅で

と思われる方もいらっしゃいます。その場合、ほとんどの葬儀屋さんが対応してくれますが、地元の信頼できる業者さんか、お寺の出入りをお勧めします。

◇お寺

仏式で行う場合、お寺はもっともふさわしい場所です。見樹院ではご家族だけの密葬でも、余計な出費をかけずに、仏様の前で荘厳なお葬式ができますので、どうぞお気軽にご相談下さい。

◇町会・自治会の会館

地域の施設は、ご自宅の延長のようなもの。人間関係が希薄になったとはいえ、地域コミュニティはまだまだ生きています。中には祭壇をもっている町会もあります。役員さんにご相談下さい。

◇民間の葬祭場

セレモニーホールや「〇〇殿」「××会館」といった、葬儀社が運営する専用の葬儀場が増えてきました。それだけに便利で合理的にできているものも多いですが、質の差もひじょうに大きいのでご注意ください。また、これらの式場は会員制になっていたりしますが、大抵はその場になって申し込むことができます。また、寺院や霊園などが管理する斎場では、葬儀社が指定されていることもあるので、まずは確認して下さい。

◇火葬場の斎場

唯一の都営である瑞江葬儀場を除いて、23区内の火葬場はすべて民営で、どこもお葬式ができる斎場が付設されています。葬儀屋さんを通じての利用となり、業者間の力関係もあるようです。火葬場が隣だから便利といわれますが、それ自体があまり便利な場所にはありません。

■お葬式の日程と流れ

「お葬式は人生を締めくくる大事な儀式なんだから住職の日程を優先して」といいたいところですが、現実的には場所と火葬という物理的な条件で決まることが多いのが事実です。ですが、故人の意志とご家族の気持ちが最も大切だと思います。浄土宗としての儀式は別途おこなったり、住職の都合がつかなければ法縁の僧侶に代わりをつとめてもらうなどで対応いたします。

以下は、東京の一般的な葬儀の流れをご紹介します。

▽通夜と葬儀・告別式

通常、火葬の時間が決まるとそこから逆算して葬儀の時間が決まり、その前日の晩が通夜ということ

になります。東京では、葬儀・告別式の後、参列者に見送られて火葬場に向かうのが一般的です。

通夜の際は、会葬者に「通夜振舞い」として飲食を出します。お焼香を済ませた人から順次別室で大皿をつついてもらう形式が一般的です。

「葬儀・告別式」と言いますが、葬儀は宗教的に死者を弔う儀式、告別式はみんなのお別れの式です。多くの場合一緒にされますが、葬儀は近親者で厳粛に行い、引き続き告別式を別に行う本来のやり方もあります。最近では一般の会葬者は通夜の方が圧倒的に多く、通夜振舞いの席もあるので、順序は逆ですが通夜で大勢の方々と別れを惜しみ、葬儀は落ち着いて行われることが多いようです。

葬儀・告別式は読経の後、近親者で棺に花などを入るお別れの儀式、その後出棺という運びになります。ここでは通常、一般の会葬者は会葬御礼をもらって見送ったらそのまま引き取ります。(この時点では会食などはありません)

▽火葬と「初七日」

火葬場へは、霊柩車に続いてバスや車に分乗して向かいます。火葬の時間はいちばん融通がききにくいので、行く行かないとか誰がどこに乗るかでもたついたり、不案内な運転ではぐれて遅くなることのないようにしましょう。

本来はお命日を入れて 7 日めが本当の「初七日」ですが、火葬場からお骨になって戻ったところで営むのが通例となっています。理屈はともかく、一連のお葬式の行事が終わり、親族がそろっているところで一つの区切りをつけるおつとめです。それに引き続き、労いの意味も含めて「精進落とし」の会食となります。

■身内だけの「密葬」

ごく近親者だけで静かに送りたい、故人が高齢で直接本人を知る会葬者は少ない、また諸般の事情を抱えて、いわゆる「密葬」も多くなりました。そのとき、単に葬儀社の規格に合わせて設備やアイテムを目一杯使ってムダな経費をかけている場面をよく見ます。心を込めて、自分ではできない本当に必要な部分だけ業者に任せて、家族で見送ればよいのです。決して最低限という意味ではなく、葬儀として十分な弔いをすることはできます。

お寺であれば、もともと設備はあるわけですし、搬送(寝台車・霊柩車)と棺と火葬場を手配すれば立派にお葬式をすることができます。健康保険や区

民葬の制度も利用できますので、どうぞ住職にご相談下さい。

「互助会」は営利企業

みなさんのお宅にも「互助会」から勧誘の電話がよくかかってくるのではないのでしょうか。「葬儀はお金がかかる。残った家族に負担をかけたくない。」という気持ちをつけて、掛け金を積み立てるものです。しかしほとんどの場合、その積み立てだけではおさまらず、残った家族が「人並み」の葬儀をするために相応の追加料金を払うことになります。これも、「積み立てていたのだから使わないと損」ということになり、結局、利用者の負担を減らすよりも、葬儀社がお客を確保するためのシステムとっていいでしょう。私だったらその掛け金分を貯金しとくか、保険に回すほうがいいと思います。もちろんそこに頼むのが一番いいと判断されたなら良いのですが、前述の通り、会員でなくてもそこが運営する会場を使うことも大抵は可能です。

選択の幅がないほど、日程や会場などの主導権も業者に握られて、寺としても困ることも多いのですが、いちばん気の毒なのは家族です。

また、「互助会」というと、なにか公的な機関と勘違いされますが、ほとんどは民間の営利会社です。

■見樹院のサポート体制

ご家族が亡くなられたとき、大変なのはお葬式を出すことではありません。相続をはじめとする様々な手続きや調整などを一定の期限内におこなわなくてはなりません。なにしろ初めての経験でわからないことだらけだったり、気が動転していたり、いろいろな人がそれぞれの思惑でアプローチしてくる中で、咄嗟に的確な判断ができる人はほとんどいないと言っていいでしょう。

見樹院では、心のケアや仏事の相談はもちろん、顧問弁護士、顧問税理士をはじめ、長年の信頼を築いた関係機関やNGOのネットワークによって、あらゆるサポートをおこないます。相続や労災、死亡退職金なども、正しい知識と情報をもとに判断しないと後悔やトラブルの原因となります。

相談だけなら費用も発生せず、対処の仕方が全く変わることもありますので、早め早めにご相談されることをお勧めします。

暴力によらない道を訴えかけています。

今私たちがしっかりと意識すべきなのは、この横線を軸とする、戦争へ向かうのか、平和的に解決するのかという、いわゆるビジョンと意志の選択を迫られているということです。

このことは、中東問題だけでなく、日本と中国、朝鮮との関係にも、ブッシュ大統領が掲げる「対テロ戦争」にも当てはまります。人々の心が怒りや憎しみ、あるいは領土や利権への欲に支配されると、差別や戦争に傾斜していきます。なぜ恨みや憎しみを抱くのか、その原因や論理を冷静に深く問う必要があります。戦争には理由があります。なぜ戦争をしたいのか、誰が得をするかということも客観的に考えてみるべきです。偏見を植え付けられ、勝手な思い込みをしているのは、メディアや教育の問題かもしれませんが、その気になれば正しい情報を得ることはいくらでもできます。

そして大切なことは、明確なビジョンを持つこと

●靖国神社問題に関しては、私としても、いろいろ意見もありますが、少なくとも外交や国家の価値観の問題を感情からはじめる今の混乱に対し、河野太郎衆議院議員がメールマガジンで昨年暮れに非常にわかりやすく書かれていたのでここにご紹介します。

中国側の言い分

2004年12月1日

(河野太郎 ごまめの歯ざしり メールマガジン版)

総理の靖国神社参拝に関して、いろいろなお意見があると思いますが、なぜ中国政府が総理の参拝に抗議するのか、その理由を知らずに議論している方がいらっしゃるようです。相手側の主張も知った上で、ぜひ議論して頂きたいと思います。

もともと靖国神社に日本の総理大臣が参拝することに対して、中国政府から抗議や反発はありませんでした。三木武夫首相は在任中に靖国神社に参拝していますし、昭和天皇も靖国神社に参拝されていました。

1972年9月に、当時の田中角栄首相と大平正芳外相、二階堂進官房長官が中国を訪れ、毛沢東主席と周恩来総理と会談し、日中共同声明に署名して、日中国交正常化への第一歩を記しました。

その日中共同声明のなかで、日本は「過去において日本国が戦争を通じて中国国民に重大な損害を与えたことについての責任を痛感し、深く反省する」との立場を明確に文書にしました。当時の中国国内には、日本に戦時賠償を求めよとの世論もありましたが、毛沢東主席、周恩来総理をはじめとする中国の指導者は、戦争は日本国内の一部の軍国主義者によって発動されたものであり、大多数の日本国民も戦争の犠牲者であるとの認識を示して、戦争の被害者が同じ戦争の被害者に賠償を求めるとはできないとの立場を取りました。日本側が戦争の責任をきちんと受け止めて反省していることを前提に、共同声明では中国側が賠償を放棄することを明確にしました。

ここでいう一部の軍国主義者の象徴が、極東軍事裁判で戦争の指導的責任を問われたA級戦犯です。そのA級戦犯が、1978年に、靖国神社に他の戦没者と一緒に合祀されてしまったことが、この靖国神社問題の発端です。

です。それぞれの立場や文化を認め合う共生の社会。暴力ではなく信頼を築くことで解決する社会。収奪や欠乏のない公正な分配が行われる社会。一朝一夕で達成されるものではありませんが、理想が絵に描いた餅にならぬよう、一人ひとりが意志を持って積み上げていかなくてはなりません。

人種や文化、価値観や宗教は違っても、お互いを尊重し合い、助け合って共存する社会をめざすことは可能です。これまでカンボジア、アフリカ、中東で、現地の人々と共に、保健や教育、福祉、環境、人権擁護等の活動を行ってきて実感します。

それに対し、武力をはじめとする力でねじ伏せようとする行為は、多大な命の犠牲ももちろんのこと、排除と抹殺の発想で、人々の社会を切り刻み、破壊します。そのような方向へ向かわせないためには、人々を戦争に向かわせる対立の構図を認識し、現代の人間として、冷静な知性と理性をもって世界に向き合うことが必要です。

戦後、憲法上の政教分離の原則の下、靖国神社も一つの宗教法人になりました。そして、宗教法人に対して政府が介入することもできなくなったため、靖国神社の運営は全く政府とは別個のものとなったのです。そして、靖国神社は宗教法人としての独自の判断で、A級戦犯の合祀を行ったのです。この合祀の後、昭和天皇は靖国神社への参拝を行われなくなりました。

そして、1985年8月15日に中曽根首相が靖国神社に「公式参拝」を行ったのをきっかけに、中国政府も日本政府に対し、首相、外相、官房長官が靖国神社への参拝をしないよう求めるようになりました。つまり、日中共同声明の中で確認した、戦争と中国国民に対する重大な損害に責任のある「一部の軍国主義者」が神として祀られている場所に、その日中共同声明に責任のある首相、外相、官房長官という役職にあるものが参拝することは、共同声明の合意に反することになるという主張です。

1972年に日中共同声明に署名をしたのは田中角栄であり、大平正芳でしたが、この二人は個人として署名したわけではなく、首相、外相という日本を代表する役職として署名したわけですから、この役職にある人物は、共同声明における合意事項を誠心誠意守るよう努力すべきだというのが中国側の主張です。つまり、首相を辞めた田中さんが靖国神社に参拝するのは良いが、現に首相の役職にある小泉さんが靖国神社に参拝するのは、中国側から見れば、日中の合意に反するということになります。

中国国民から見れば、本来多額の賠償を取るべきだったにもかかわらず、同じ戦争の被害者だからという中国指導部の主張に沿って賠償を放棄したら、その責任を取るべき「一部の軍国主義者」が神として祀られてしまった。まあ、そのことは日本政府とは関係のない一宗教法人の行為ですが、その宗教法人に首相が参拝すれば、共同声明に合意した日本政府の代表が宗教法人の行為を追認したことになるってしまいます。日本側が共同声明の合意をほごにするのならば、こちら側も賠償放棄を取り消して、賠償を求めようではないか、ということになってしまいます。だから、中国政府は、日本政府に対し、A級戦犯が合祀されている靖国神社に、首相が参拝することは、日中間の合意を踏みこむ行為だから、やめてほしいと言ってくるのです。